

備える 3.11から 災前の策

第136回 住宅密集地の火災

消防車入れない路地

約十五万人が犠牲となった二〇一一年(平成二三年)の関東大震災が伝わるように、都市部の地震で怖いのは家の倒壊に続く火災だ。九五(平成七)年阪神大震災では少なくとも七百八十件の火災が発生し、神戸市長田区では四千七百棟以上が全焼した。昨年十月に新潟県糸魚川市で起きた火災では、古い造り家が集まる市街地で中心部を強風が吹き抜け、延焼。百四十四棟を焼く被害が広範囲に及ぶ。火災の恐ろしさを改めて示した。住宅密集地の現状を掘り明した。火災の仕組みを解説。(塚田真裕)



糸魚川の火災を「明日は我が身」と感じ、防災意識の向上を訴える太田真人さん(左)と糸魚川市在住の田村真一さん(右)。糸魚川市は、火災の発生頻度が高い。

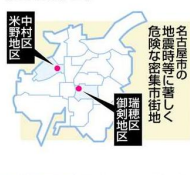
近所で避難呼び掛けが鍵

「見てください、糸魚川の火災は、明日は我が身です」と。糸魚川市在住の太田真人さん(左)と糸魚川市在住の田村真一さん(右)は、近所で避難呼び掛けが鍵を握る。火災にならば、消防車が入れない路地や、古い造り家が集まる市街地。消防車は入れない路地や、古い造り家が集まる市街地。消防車は入れない路地や、古い造り家が集まる市街地。消防車は入れない路地や、古い造り家が集まる市街地。消防車は入れない路地や、古い造り家が集まる市街地。

民も少なくない。消防調査員の経験がある太田さん(左)は、「調査でなかなか会えなかった人もいた。火事になったら自分も逃げられるように。近所で避難呼び掛けが鍵を握る。」

新重点密集市街地 地震時に建物倒壊して道路がたふさがるなど「危険時等」を指す

国土交通省は、2012年9月時点で全国に197地区ある。中部2地区と安城市1地区、滋賀県内は2地区。



濃尾地震で消えた橘座復活
岐阜・愛知両県を中心とする濃尾地域は、明治十三年の濃尾地震で、激しい揺れで多くの建物が倒壊した。現在は、復興を期して、旧来の建物を復元している。このうち、岐阜市にある「橘座」は、明治十三年の濃尾地震で、激しい揺れで多くの建物が倒壊した。現在は、復興を期して、旧来の建物を復元している。



歴史に学ぶ

大昔に建てられた建物の中には、地震に強い構造のものがある。歴史を学ぶことで、現代の建物に活かすことが出来る。大昔に建てられた建物の中には、地震に強い構造のものがある。歴史を学ぶことで、現代の建物に活かすことが出来る。



都市部の大規模火災 巨大な炎の竜巻 予防に初期消火

都市部で大規模火災が起きるときは、巨大な炎の竜巻が生まれる可能性がある。これを防ぐには、初期消火が重要だ。消防隊は、予防に初期消火を心がけている。



中村祐二准教授



火柱一瞬で10分に
火災発生後、火柱は10分以内に10メートルの高さまで達する。この間に、火柱が周囲に広がる。消防隊は、この間に初期消火を行う必要がある。

火柱が10分以内に10メートルの高さまで達する。この間に、火柱が周囲に広がる。消防隊は、この間に初期消火を行う必要がある。